ひがし ばら い せき

東原遺跡

自動車電話・携帯電話無線局鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

掛川市教育委員会

株式会社　フジヤマ

東原遺跡

ひがしばらいせき

自動車電話・携帯電話無線局鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

掛川市教育委員会

株式会社　フジヤマ

例　　言

1．本書は、平成16年11月19日から平成16年12月28日まで実施した、静岡県掛川市高田字東原1146-2に所在する東原遺跡の発掘調査報告書である。整理作業は、平成16年12月29日から平成17年３月25日まで実施した。
2．調査は、自動車電話・携帯電話無線局鉄塔建設工事に伴う本発掘調査である。
株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海（愛知県名古屋市中区栄4-1-8）が発掘調査費用を全額負担し、掛川市教育委員会の指導のもと、株式会社フジヤマ（静岡県浜松市天竜川町303-6）が発掘調査を実施した。調査面積は150㎡である。
3．発掘調査に際し、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海及び地権者である青木克之氏には東原遺跡の保護・保存について御理解と御協力をいただいた。
4．発掘調査は、掛川市教育委員会の指導のもと、株式会社フジヤマ　文化財研究室 吉田 始（業務代理人・主任技術者）・菅原雄一（業務担当者）が担当した。
5．発掘調査指導は掛川市教育委員会教育文化課　文化財係長　松本一男・同　主任　木村弘之が行った。
6．整理調査・報告書作成は、掛川市教育委員会の指導のもと、株式会社フジヤマ　文化財研究室 吉田 始（業務代理人・主任技術者）・菅原雄一（業務担当者）が担当した。
7．発掘調査ならびに整理作業では下記の方々の参加を得た。
【発掘調査】伊藤和子・鈴木静江・鈴木千代乃・萩田俊雄
【整理調査・報告書作成】太田彩子・鈴木晶代・水野知恵子
8．本書は、「Ⅰ　調査に至る経緯」を掛川市教育委員会　主任　木村弘之が、「Ⅲ　調査の方法と経過」を吉田 始が執筆し、その他の執筆・編集を菅原雄一が行った。
9．調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．挿図における方位は、真北を示す。
2．遺物番号は、挿図と写真図版とで共通する。
3．使用測地系は、世界測地系（測地成果2000）である。
4．土層・土器の色調は、農林水産技術会議事務局監修1992新版『標準土色帳』を使用した。
5．本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。
ＳＢ：竪穴住居跡　　ＳＫ：土坑　　ＳＰ：小穴　　ＳＸ：不明遺構

目次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　地理的・歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 6
Ⅳ　発掘調査の成果 …… 8
Ⅴ　まとめ …… 19

挿図目次

第１図　掛川市の位置 …… 1
第２図　調査区の位置 …… 2
第３図　周辺遺跡分布図 …… 5
第４図　グリッド配置図 …… 6
第５図　基本土層図 …… 8
第６図　遺構全体図 …… 8
第７図　SB01実測図 …… 10
第８図　SK01・SP116実測図 …… 11
第９図　出土遺物１ …… 15
第10図　出土遺物２ …… 16

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧 …… 4
第２表　小穴（Ｐｉｔ）一覧 …… 12
第３表　出土土器観察表 …… 17

写真図版目次

図版１　１．東原遺跡遠景（東から）
　　　　２．東原遺跡遠景（南西から）
図版２　１．調査前状況（北東から）
　　　　２．完掘状況（北東から）
図版３　１．完掘状況（南西から）
　　　　２．完掘状況（真上から）
図版４　１．SB01上面床検出状況（北西から）
　　　　２．SB01完掘状況（北西から）
図版５　１．SB01炉(火皿)（南西から）
　　　　２．SB01炉(火皿)・地床炉（東から）
　　　　３．SB01地床炉（西から）
図版６　１．SB01土器出土状況（東から）
　　　　２．SP116土器出土状況（北から）
図版７　１．SK01土器出土状況（東から）
　　　　２．SK01完掘状況（東から）
図版８　出土遺物①
図版９　出土遺物②

Ⅰ　調査に至る経緯

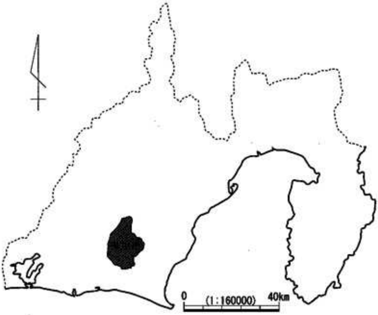
東原遺跡が所在する和田岡原（各和原・高田原・吉岡原）には、縄文時代から古墳時代にかけて営まれた遺跡が多数集中して存在する。特に、直径30mの円墳・春林院古墳、全長40～60mを越える前方後円墳・吉岡大塚古墳、瓢塚古墳、各和金塚古墳、行人塚古墳と数多くの中小円墳が占地しており、これらを総称して和田岡古墳群と呼称している。平成８年３月29日、国指定史跡となった。

現在、遺跡のある個所の多くは、茶畑として利用されている。平成16年４月、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海から、高田地内において、自動車電話・携帯電話無線局鉄塔を建設する計画があがり、同地に埋蔵文化財が分布しているか否かの照会が掛川市教育委員会にあった。同社には同地内に埋蔵文化財が存在することから、確認調査を実施する必要がある旨を伝えた。この段階においては、候補地の一つであったことから、同地に決定した段階で改めて双方協議することとなった。なお、その際に、確認調査実施後、同地に遺跡が存在した場合、市教育委員会では平成16年度中の対応は不可能である旨を話した。また、民間発掘調査機関に依頼して発掘調査を実施する方法もあることを併せて伝えた。

こうしたことから、平成16年７月14日、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海から掛川市教育委員会へ、掛川市高田字東原1146-2地内の「確認調査依頼書」が提出された。これを受け、掛川市教育委員会では確認調査計画書（平成16年９月６日付け掛教文財第133号）を株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海へ提出した。同計画書に基づき、茶樹伐採後の平成16年９月15日に同地内の確認調査を実施した。

確認調査では、同地内で十文字にトレンチ（試掘溝）及び２箇所に１m四方の試掘穴を掘削した。調査の結果、弥生時代後期の住居跡１軒と土坑１基を確認した。

確認調査結果を受け、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海と掛川市教育委員会との協議を行った。発掘調査を市教育委員会で行った場合、平成17年４月以降の調査実施となり、無線局開局に間には合わなくなることから、協議の結果、民間発掘調査機関に調査を依頼することとなった。掛川市教育委員会では、県教育委員会の指導のもと、県内及び近県の民間発掘調査機関を選定し、これを株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海へ紹介した。この結果、株式会社フジヤマを同社が選択し本発掘調査をすることになった。



第１図　掛川市の位置

本発掘調査を開始するにあたっては、掛川市教育委員会と株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海及び株式会社フジヤマの三者で協定書を交わし、その中で発掘調査に至る手続きと調査方法については掛川市教育委員会の指導のもとに進めていくこととした。なお、調査終了後における遺物・図面の保管については、掛川市教育委員会が管理することとした。

本発掘調査は、株式会社フジヤマにより平成16年11月19日～同年12月28日まで実施された。本発掘調査終了後、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ東海から自動車電話・携帯電話無線局鉄塔建設工事について、文化財保護法に基づく届出が掛川市教育委員会へ提出された。

○ 文化財保護法第57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届（自動車電話・携帯電話無線局鉄塔建設工事）平成17年1月18日付

○ 土木工事等のための発掘調査に係る指示について（工事立会い）教文第10136号 平成17年2月7日

平成16年12月29日～平成17年3月25日までの間、報告書刊行作業を実施した。

第2図　調査区の位置

Ⅱ　地理的・歴史的環境

地理的環境　掛川市は、静岡県西部地方（大井川以西）にあり、東経138度線上に位置する。南に小笠山、東に牧之原台地に続く丘陵、北には赤石山脈から連なる丘陵に取り囲まれ、その間を原野谷川、逆川をはじめとする中小河川が流路を形成している。これらの河川が形成した沖積平野の端には、開析した小さな谷が無数に入り込んでいる。

東原遺跡は、掛川市の最高点である八高山を源とする原野谷川が形成した和田岡原と呼ばれる河岸段丘上に位置する。段丘は、特に西岸に発達し、北に位置する原泉、原田、原谷では小規模な段丘を形成しているが、和田岡地区に至ると東西約1.2km、南北約2.2kmに広がる。また、東岸には独立丘陵の岡津原が形成されている。さらに、南方の各和から袋井市不入斗にかけても段丘が形成されている。

この段丘は、第四紀洪積世に形成され、砂岩、頁岩の他に一部シルト層を挟んで成り立っているとされる。表土以下の黒色土（いわゆる“黒ボク土”）、又は暗褐色土の下には、粘性のある緻密な黄褐色土が堆積している。遺構は、この黄褐色土を掘り込んで築かれている。

段丘は、大きく分けて標高60m前後の吉岡原と呼ぶ上位段丘面と、標高40～50m前後の高田原と呼ぶ下位段丘面に区分される。当該遺跡は上位段丘面の吉岡原に築かれている。段丘は第3図のように、南端が先細る舌状を呈し、緩やかに傾斜している。

歴史的環境　和田岡原の地区全域に、遺跡が所在すると言っても過言ではない。これは、第3図の周辺遺跡分布図を見ても明らかである。

この地に見られる最も古い人々の痕跡は、高田上ノ段遺跡（庵ノ下）で採集された尖頭器である。これは、堂山遺跡（原里）で採集された有舌尖頭器と同時期とされ、現在市内最古の尖頭器である。

縄文時代になると、遺跡は少しずつ数を増し、瀬戸山Ⅰ・Ⅱ、向山、高田遺跡で押型文土器などが出土している。中期になると、遺跡の数は増大し、最盛期を迎える。中原遺跡では竪穴住居跡が発見されている。その後、後・晩期になると和田岡原地区では、遺跡の数が減少していく。

弥生時代前期の動向は不明であるが、遺跡として姿を現すのは弥生時代中期になってからである。高田・吉岡原では遺構は伴っていないが、岡津原の岡津原遺跡や各和の山下遺跡では200mにも及ぶ大規模な墓域が形成されている。現在のところ、これらの墓域を形成した人々が営んだ集落は、段丘上では確認されていないが、周辺の低地に営まれていたと推定している。

弥生時代後期には遺跡が爆発的に増加する。高田・吉岡原の段丘縁辺部には、至る個所で重なり合った竪穴住居跡が確認されている。集落は、古墳時代前期に継続されるものが多いが、その数は減少する。一方、近年の調査では、段丘の南において古墳時代前期に集落の最盛期を迎える遺跡も発見されてきた。東遠江で見た場合、弥生時代後期後半から沖積地に立地する遺跡が減少し、同時に、台地上もしくは高所に多くの集落が営まれる傾向がある。この和田岡地区においても、その傾向がみられる。これは、東遠江一帯に社会的緊張関係が続いたことから、段丘上に集落が営まれたと見られている。

古墳時代中期５世紀になると、各和金塚古墳、瓢塚古墳、行人塚古墳、吉岡大塚古墳、春林院古墳といった和田岡古墳群（平成８年国指定史跡）が築造される。また、和田岡原では、これら首長墓のほかに、刀子などが供えられた長方形の掘り方をもつ土壙墓、方墳、円墳などが検出されている。前期まで営まれた集落は、中期になると姿を消している。現在のところ、この時期のものとして女高遺跡の竪穴住居跡１軒が確認されているに過ぎない。和田岡古墳群を築造した集団は、社会的緊張が解け、低地へと集落の場を移していったのであろうか。今後の沖積地において、発掘調査によって明らかとなるであろう。

番号	遺跡名	種類	時代
1	久保山横穴群	横穴	
2	久保遺跡	散布地	弥生・後
3	後藤ケ谷古墳	円墳	
4	後藤ヶ谷遺跡	散布地	弥生・後～古墳・中
5	中山遺跡	散布地	弥生・後～古墳・前
6	西山城	城館	中近世
7	城ノ腰遺跡	散布地	弥生・後～古墳・中
8	東原遺跡	集落	縄文・晩、弥生・後～古墳・前
9	今坂古墳	円墳	古墳・後
10	今坂遺跡	散布地	弥生・後～古墳・前
11	溝ノ口遺跡	集落	縄文・中、弥生・後～古墳・前
12	中原遺跡	集落	縄文・中
13	高田上ノ段遺跡	集落	弥生・後～古墳・中
14	大塚古墳	前方後円墳	古墳・中
15	高田上ノ段古墳	円墳	古墳・後
16	吉岡下ノ段遺跡	集落	縄文・中・晩、弥生・後～古墳・後、平安
17	吉岡下ノ段古墳群	円墳（６基）	古墳・中
18	春林院古墳	円墳	古墳・中
19	林遺跡	集落・散布地	弥生・後～古墳・前、平安～中近世
20	西村遺跡	散布地	古墳・中～奈良
21	宮脇行人塚古墳	円墳	
22	藤六古墳群	円墳（４基）	
23	吉岡原古墳群	円墳（３基以上）	古墳・後
24	吉岡原遺跡	集落・円墳	縄文・中・後、弥生・後～古墳・前
25	大向遺跡	散布地	縄文・中
26	瀬戸山Ⅰ遺跡	集落・散布地	縄文・早・中、弥生・後～古墳・前
27	瀬戸山Ⅱ遺跡	集落・散布地	縄文・早・中、縄文・晩～古墳・前
28	瀬戸山Ⅲ遺跡	集落・散布地	弥生・後～古墳・前
29	瀬戸山古墳	円墳	
30	花ノ腰遺跡	散布地	弥生・後～古墳・前
31	高田遺跡	集落	縄文・中、弥生・後～古墳・中
32	東登口古墳群	円墳（６基）	
33	平田ヶ谷遺跡	散布地	縄文・中、弥生・後～古墳・前
34	女高Ⅰ遺跡	集落	弥生・中～古墳・前
35	行人塚古墳	前方後円墳	古墳・中
36	女高古墳群	円墳（３基）	古墳・中
37	女高Ⅱ遺跡	散布地	縄文・晩、弥生・後～古墳・前、奈良～平安
38	瓢塚古墳	前方後円墳	古墳・中
40	谷房ヶ谷古墳群	円墳（８基）	古墳・中
41	高田古墳	円墳	古墳・中

第１表　周辺遺跡一覧

第３図　周辺遺跡分布図

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

発掘調査　本調査区は、南北14m×東西11mの長方形を呈している。そうしたことから、調査区の形状に合わせて任意でグリッド杭を５ｍ間隔で設置した。グリッドは、南北方向に北からＡ・Ｂ・Ｃとアルファベットを付し、東西方向は西から１・２・３と付け、北西杭の名称をＡ１・Ｂ１・Ｃ１として、同時にグリッド名とした。

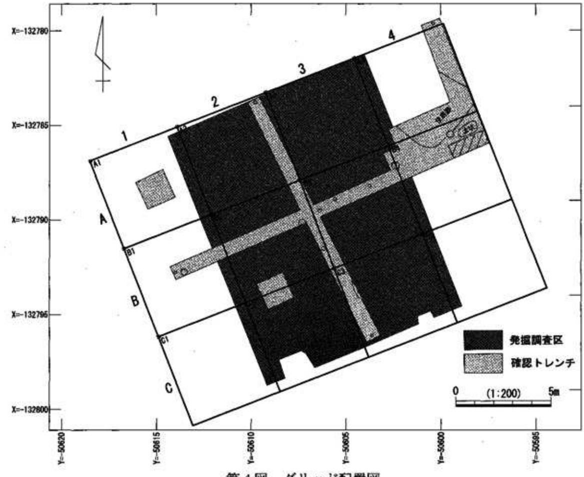
調査は、まず重機により耕作土と黒色土を除去した。黄褐色土面で精査を行い、遺構の検出と確認を行い、人力による掘り下げ、作図、写真撮影完了後、調査を完了した。

測量用の基本杭の設置は、平面直角座標（第Ⅷ座標系）を基に設置した。また、ベンチマークの高さの基準は、標高（東京湾の平均海面）とした。なお、測地系は世界測地系を使用した。

遺構等の実測にあたっては、１ｍ方眼に水糸を張り、遺構実測を1/20縮尺で、遺物出土状況図は1/10縮尺で記録した。これらの遺構、遺物には標高を記録した。土層図も1/20縮尺で記録した。

写真撮影は、ブローニーサイズ（6×7）原画白黒、35㎜サイズカラーネガ、同カラーリバーサル、同モノクロを用いて撮影した。この他、ラジコンヘリコプターで調査区全景と遺跡遠景などの撮影を行った。

また、12月19日に現地説明会を実施し、地元の方々を中心に約30名の参加を得た。



第４図　グリッド配置図

整理・報告作業　出土した遺物は洗浄し、自然乾燥させた後、注記を行い、復元が必要可能なものを抽出し、合成樹脂で復元を行った。

遺物実測作業及び図面整理・浄書（デジタルトレース）作業は、現地で実測した遺構図（1/20縮尺）などを基に、遺構全体図及び各遺構図、遺物出土状況図などの編集図版下を作成した。さらに、印刷ができるようにデジタルトレースを行った。

写真類は、撮影順にアルバムに整理し、遺構名などを記入した。これらの中から、報告書の写真図版に掲載するための写真を抽出し、版組、割り付けした。また、遺物写真は、撮影した後、割り付けと版組を行った。

報告書の執筆作業は、発掘調査で得られた成果を原稿の形にまとめ、整理された実測図版や写真図版及び原図等を基に詳細を説明した。

2　調査の経過

調査経過は、以下のとおりである。

11月19日	資機材の搬入	11月26日	遺構の掘削と実測（～12月16日）
11月22日	重機による表土除去	12月17日	ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影
11月24日	遺構検出（～11月26日）	12月18日	資機材の撤収（～12月28日）
11月25日	SB01検出	12月19日	現地説明会

写真１　掘削作業風景

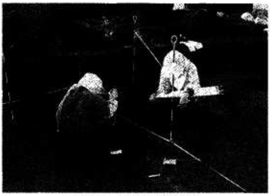


写真２　実測作業風景

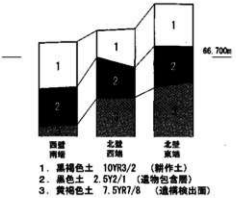
写真３　土器復元風景

写真４　土器実測風景

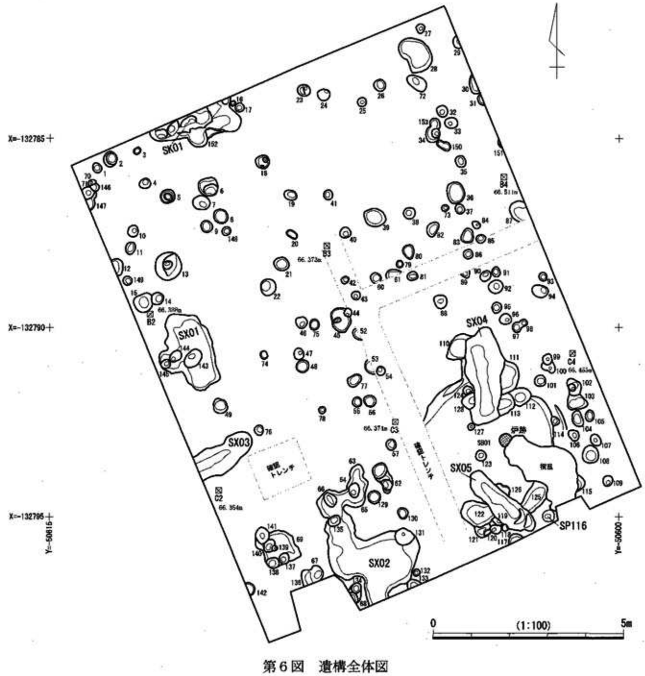
Ⅳ　発掘調査の成果

1　基本土層（第5図）

東原遺跡の基本土層は、茶栽培に伴う耕作土（1層）、弥生時代後期から古墳時代前期に属する遺構の掘り込み面である黒色土（2層）、その下層の黄褐色土（3層）となる。3層は約50cmの厚さをもって黄褐色礫土の基盤層に至る。調査での遺構確認は、2層が黒色土で遺構の検出が困難であったことから、3層の黄褐色土で行っている。よって2層は遺物包含層として扱っている。



第5図　基本土層図（S=1/20）



第6図　遺構全体図

2　遺構（第６～８図）

概要　今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた集落跡が見つかった。集落跡のうち、検出された遺構は竪穴住居（ＳＢ）１軒、土坑（ＳＫ）１基、小穴（ＳＰ）多数、不明遺構（ＳＸ）５基である。

竪穴住居（SB01・第７図・図版４～６）　Ｃ３区において検出された。一部、住居跡より古いと考えられる不明遺構（SX04・SX05、風倒木痕と想定）と重複しており、覆土が住居跡覆土と同様の黒色土であったことから、明確なプランや柱穴の検出が困難であった。

平面形は、南北にやや長い隅円方形となっており、規模は推定で南北約400cm、東西約350cm、深さは確認面で約20cmを測る。住居跡覆土は、基本的に黒色土が堆積していた。

床面は２面検出された。上面の床は、黒色土をベースとしてローム質の黄橙色土をブロック状に含む土によって、厚さ約10cm程度の貼り床が形成されていた。下面は、ローム質の黄橙色土をベースとした土によって、厚さ約５cm程度の貼り床が形成されていた。

屋内施設としては、炉２基と小穴数基が検出された。壁溝は見られない。２つの炉は、住居内の中心よりやや北東側に寄った所に、上下で全く同じ位置に設置されていた。上面の床に対応する炉は、床面を浅く掘り込み、粘土を環状に一周させて帯とする、いわゆる火皿であった。下面の炉は、地床炉であった。地床炉の上からは、６～12cmの礫が３個体見られた。主柱穴については、先述した不明遺構との重複から検出には至らなかった。

床面の状況から建て替えが行われたことがわかるが、炉の位置関係や壁面の検出状況から、ほぼ同じ位置に、同じ規模・プランで行われたものと想定される。

出土遺物は、住居跡覆土から多く出土している。住居内の北東部において、上面の床に近い高さから、高坏２点（第９図１・３）と脚付甕１点（第９図２）がまとまって出土している。

この土器から、SB01の構築された時期は弥生時代後期後半（菊川式）であると考えられる。

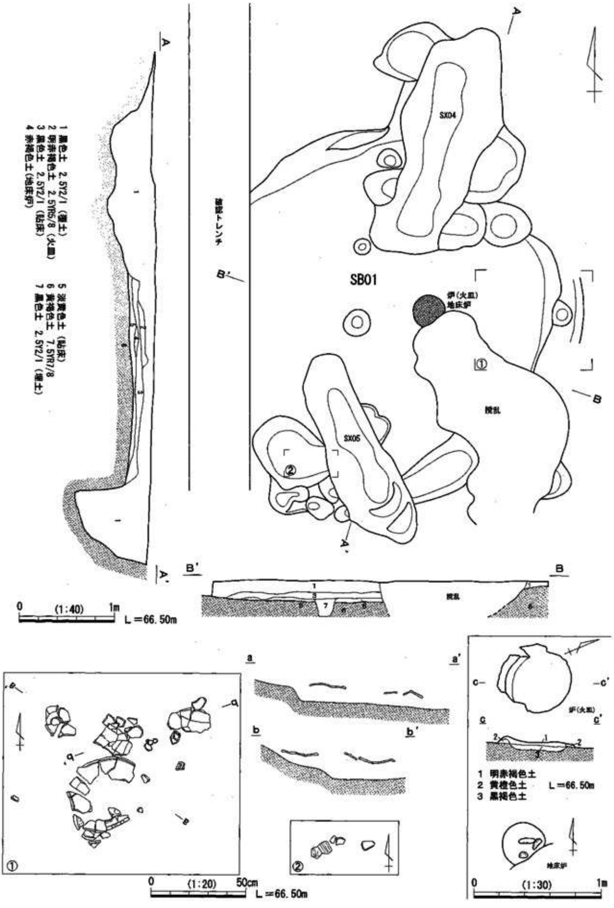
土坑（SK01・第８図・図版７）　Ａ２区において検出された。SP152と南側で一部重複しているが切り合い関係からみるとSP152のほうが新しい。調査区の範囲外に及んでいたため、全形は不明であるが、確認された範囲での規模は東西475cm、南北190cm、確認面からの深さ約110cmを測り、東西に長い楕円形となる。

遺構内埋土は２層に分かれるが、上層の黒色土は土師器を多量に含む一方で、下層の黒色土から遺物は全く出土しなかった。

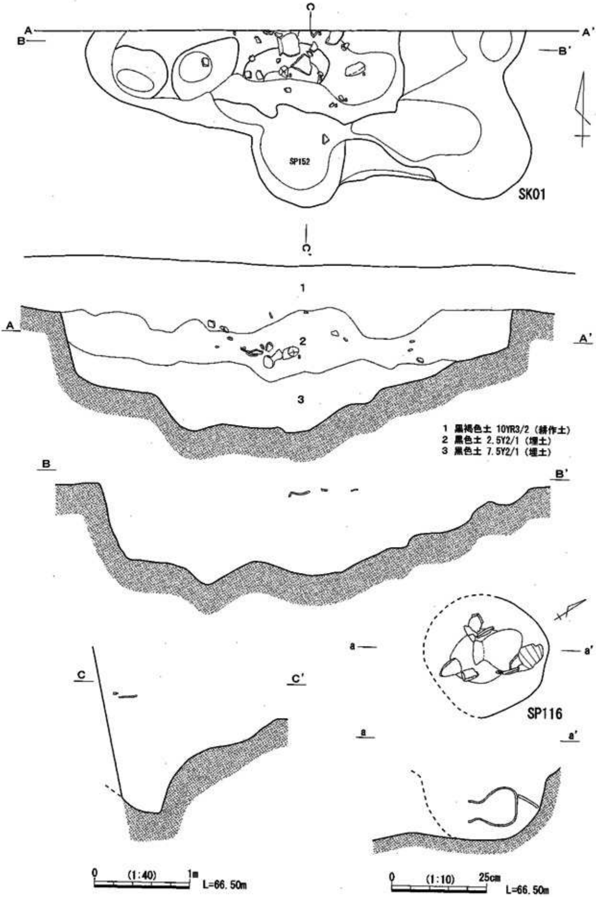
土坑中心部の上層埋土内からは、甕・壷・器台・高坏などの土師器がまとまって出土している。

これらの土器から、SK01の時期は古墳時代前期であると考えられる。

小穴（SP01～153・第６図・図版６・第２表）　小穴は多数検出されたが、明確な根拠をもって建物跡として組み合う柱穴は確認できなかった。しかし、小穴の検出位置に疎密が見られる傾向は指摘できる。出土遺物も、埋土からの小破片が大半であるが、Ｃ３区のSP116からはほぼ完形の小型壷（第９図15）が出土した。遺構は上端径約33cm、下端径約16cm、確認面からの深さ約16cmを測る。小型壷は、比較的底に近い場所から、横倒しの状態で出土した。周囲には甕の破片が散在していた。時期は古墳時代前期であると考えられる。


SB01
SX04
SX05
炉(火皿)
地床炉
攪乱
確認トレンチ
1 黒色土 2.5Y2/1 (覆土)
2 明赤褐色土 2.5YR5/8 (火皿)
3 黒色土 2.5Y2/1 (貼床)
4 赤褐色土 (地床炉)
5 淡黄色土 (貼床)
6 黄褐色土 7.5YR7/8
7 黒色土 2.5Y2/1 (覆土)
(1:40)
L＝66.50m
(1:20)
50cm
1 明赤褐色土
2 黄橙色土
3 黒褐色土
(1:30)
1m

第７図　SB01実測図



第８図　SK01・SP116実測図

不明遺構（SX01～05・第6図）　形状が不定形で、出土遺物も少なく、性格が不明な遺構を一括した。これら不明遺構とした5基のうち、SX03～05の3基は、土坑状を呈するが、覆土の黒色土中からは、ほとんど遺物が出土せず、平・断面形状においても不安定なものである。そうした状況から、これらは、中原遺跡、高田上ノ段遺跡、女高遺跡などの近隣遺跡において見られた風倒木痕であろうと推測される。

遺構番号	グリッド	幅		深さ	遺構番号	グリッド	幅		深さ	遺構番号	グリッド	幅		深さ
		長軸	短軸				長軸	短軸				長軸	短軸	
SP01	A1	28	24	23.5	SP52	B2	34	(15)	7.0	SP103	C3	52	(37)	15.3
SP02	A2	41	35	48.9	SP53	B2	41	(16)	9.0	SP104	C3	44	17	7.4
SP03	A2	18	16	5.1	SP54	B3	24	23	28.8	SP105	C3	30	23	5.9
SP04	A2	30	25	14.2	SP55	B2	25	24	5.5	SP106	C3	31	25	5.8
SP05	A2	38	35	17.3	SP56	B2	32	29	5.4	SP107	C3	32	26	35.2
SP06	A2	50	47	39.5	SP57	C2	29	26	12.1	SP108	C3	49	41	29.5
SP07	A2	44	36	12.3	SP58	B2	26	25	8.7	SP109	C3	28	23	11.3
SP08	A2	40	35	8.1	SP59	B2	24	23	8.5	SP110	C3	71	(44)	18.4
SP09	A2	39	39	7.5	SP60	B3	28	26	7.7	SP111	C3	82	(49)	24.9
SP10	A2	28	26	30.0	SP61	B3	42	(19)	7.6	SP112	C3	(48)	45	19.1
SP11	A2	33	25	7.8	SP62	C2	82	35	16.7	SP113	C3	55	(39)	6.0
SP12	A1	46	(29)	8.6	SP63	C2	40	(42)	12.9	SP114	C3	24	(20)	5.9
SP13	A2	73	68	36.0	SP64	C2	39	26	31.7	SP115	C3	43	(19)	14.5
SP14	A2	32	31	11.4	SP65	C2	(72)	52	6.5	SP116	C3	40	32	14.6
SP15	A1. A2	54	45	18.7	SP66	C2	39	30	21.3	SP117	C3	40	(20)	14.9
SP16	A2	14	12	16.9	SP67	C2	(37)	35	11.0	SP118	C3	16	(15)	24.1
SP17	A2	25	22	26.0	SP68	C2	31	(10)	17.3	SP119	C3	(27)	(15)	9.6
SP18	A2	36	35	12.7	SP69	C2	92	86	8.1	SP120	C3	30	23	15.8
SP19	A2	34	26	14.0	SP70	A1	20	16	16.8	SP121	C3	43	(14)	22.2
SP20	A2	30	17	6.3	SP71	A1	(33)	41	16.0	SP122	C3	87	62	29.9
SP21	A2. B2	39	35	8.9	SP72	A2	58	32	12.6	SP123	C3	29	27	21.8
SP22	B2	42	38	21.3	SP73	B3	19	17	10.1	SP124	C3	22	20	7.3
SP23	A3	34	31	24.6	SP74	B2	22	18	6.8	SP125	C3	(81)	48	11.3
SP24	A3	33	31	35.3	SP75	B2	28	25	5.9	SP126	C3	47	(19)	6.2
SP25	A3	23	22	15.7	SP76	B2	26	20	16.2	SP127	C3	17	16	5.6
SP26	A3	32	29	26.4	SP77	B2	40	28	6.9	SP128	C3	(50)	(34)	15.6
SP27	A3	24	21	19.5	SP78	B2	18	17	7.5	SP129	C2	35	34	6.7
SP28	A3	97	65	10.3	SP79	B3	13	18	4.6	SP130	C2	31	25	7.6
SP29	A4	34	(27)	25.9	SP80	B3	37	27	5.3	SP131	C2	50	43	10.1
SP30	A4	51	(23)	3.3	SP81	B3	27	23	12.4	SP132	C2	19	18	21.6
SP31	A4	34	(16)	4.5	SP82	B3	39	28	7.5	SP133	C2	38	21	11.2
SP32	A3	31	28	25.5	SP83	B3	35	31	8.9	SP134	C2	26	25	10.6
SP33	A3	34	28	37.0	SP84	B3	23	17	28.3	SP135	C2	32	25	21.2
SP34	A3	(43)	37	20.2	SP85	B3	26	22	16.0	SP136	C2	(35)	(24)	3.8
SP35	A3	32	26	9.2	SP86	B3	24	23	22.9	SP137	C2	27	26	4.9
SP36	A3. B3	56	48	9.5	SP87	B3	(64)	52	8.3	SP138	C2	32	26	17.1
SP37	B3	27	23	6.5	SP88	B3	37	33	39.0	SP139	C2	15	13	15.3
SP38	A3. B3	31	29	6.9	SP89	B3	(17)	25	7.0	SP140	C2	35	(21)	3.9
SP39	A3. B3	58	46	8.0	SP90	B3	30	24	36.1	SP141	C2	44	34	20.1
SP40	A3	30	26	28.4	SP91	B3	27	22	5.3	SP142	C2	36	(20)	8.7
SP41	A3	27	23	30.5	SP92	B3	38	35	17.8	SP143	B2	54	37	37.5
SP42	B3	20	19	7.0	SP93	B3	22	21	11.8	SP144	B2	35	25	6.5
SP43	B3	24	22	24.1	SP94	B3	44	33	48.2	SP145	B2	26	23	26.9
SP44	B2	20	19	34.5	SP95	B3	28	25	17.8	SP146	A1. A2	(20)	(17)	5.7
SP45	B2	66	49	28.3	SP96	B3	31	28	18.5	SP147	A1	(24)	(31)	6.7
SP46	B2	30	29	10.0	SP97	B3	26	(23)	9.2	SP148	A2	24	22	6.0
SP47	B2	31	26	13.5	SP98	B3	18	(17)	9.3	SP149	A1	25	24	9.3
SP48	B2	34	32	5.1	SP99	B3. C3	29	23	17.9	SP150	A3	39	20	6.5
SP49	B2	41	36	11.0	SP100	C3	38	(15)	10.4	SP151	A4	26	(10)	12.2
SP50	B2	31	(20)	13.0	SP101	C3	29	28	22.1	SP152	A2	49	(21)	18.0
SP51	B2	32	27	31.7	SP102	C3	(45)	34	35.8	SP153	A3	(40)	29	6.3

※単位はcm。（　）内の数値は調査区外・トレンチ内・遺構重複のため、残存値。

第2表　小穴（Ｐｉｔ）一覧

3　遺物

概要　出土した遺物は、全て土器である。出土量は、コンテナ箱（545×336×200）にして５箱程度である。SB01・SK01・SP116から比較的まとまった状態で出土している。しかし、全体的に小破片が多く摩滅も著しい。以下、出土遺構ごとに説明を行っていく。

SB01出土遺物（第９図１～６）　覆土から数十点出土している。そのうち、１～３の３点は住居跡北東部においてまとまった状態で出土した。１は、高坏である。脚部及び口縁部を欠損している。坏部の外面は、ナナメハケ後縦位のミガキを施し、内面は口縁部にヨコハケ、体部にユビナデを施している。また、脚部との接合部には櫛刺突文がわずかに認められることから、櫛刺突羽状文が施されていたものと推測される。３も高坏である。脚部を欠損している。口径約16.6cmを測る。口縁部の外反度は弱く、端部を折り返す。口縁端部上端にキザミを施し、外面体部はヨコハケとタテハケ、内面は口縁部をヨコハケ、体部をユビナデによって調整している。２は、脚付甕である。同様に脚部を欠損している。口径約27cmを測る。口縁部の屈曲と体部の張りは、やや弱い。口縁端部は、平坦面をつくり出し、キザミを施す。外面はナナメハケ、内面は口縁部をヨコハケ、体部をユビナデにより調整している。１～３は、弥生時代後期後半（菊川式後半）に属するものと思われるが、出土状況から、ほぼ同時期のものと考えられる。４は、小型壷の底部と考えられる。平底を呈し、外面はナナメハケ後ミガキを、内面はユビナデを施している。５は、Ｓ字甕の口縁部である。小破片であるため、調整等の詳細は不明である。６は壷の頸部と思われる。外面に結節縄文が見られる。５・６は、古墳時代前期に属するものと思われる。

SK01出土遺物（第９図７～14）　上層より20点程の破片が集中して出土している。遺構が半分調査区外に及んでいることもあって、完全に復元できた個体はない。７は、器台である。口縁端部及び脚端部を欠損している。脚部は直線的にハの字に開き、円形の透かし穴を等間隔で三方に施している。坏部と脚部の接合部内面は、中空状になっている。外面はユビオサエを行い、脚部は縦位のミガキを施す。８・９は、高坏である。いずれも口縁端部及び脚部を欠損する。８は、外面底部との境に稜をもつ。10は、壷の口縁部である。確認調査で出土した41と形態的に類似するが、擬凹線は、明瞭に認められない。11は、壷の頸部と思われる。外面に櫛刺突羽状文が３段見られる。12は、壷の体部と思われる。外面は縦位のミガキ後、横位のミガキが施されている。13は、甕の体部と思われる。内外面ともにナナメハケが施されている。14は、甕である。口径約16.8cmを測る。やや張りの弱い体部からくの字状に屈曲して口縁部となり、端部が下方に伸びる。外面体部はナナメハケが施されている。

これらの遺物は出土状況から一括性の高いものと考えられるが、その帰属時期は器台や有稜高坏などの器種構成から古墳時代前期になるものと思われる。

小穴（ＳＰ）出土遺物（第９・10図15～23）　小穴からは埋土より遺物が出土しているが、いずれも小破片で図示できるものは少ない。15・16は、遺構の項で記述したSP116出土の遺物である。15は、小型壷である。口縁端部を欠損している。平底で、底部付近で最大径をもち、口縁部はやや長く、内湾気味となる。外面は摩滅のため、調整は不明瞭であるが、内面にはユビナデが見られる。古墳時代前期に属するものと思われる。16は、甕の体部と思われる。外面にはナナメ

ハケが見られる。その他の遺物は、埋土より破片として出土している。17・20・23は、甕の体部である。いずれも外面にタテハケが見られ、17では内面にヨコハケが認められる。18は、坩もしくは高坏の口縁部と思われる。口縁端部がわずかに上方へ屈曲する。外面にはタテハケが微かに見られる。19は、高坏もしくは壷の口縁部と思われる。端部を折り返し、下端にキザミを施す。21は、壷の底部である。厚手の底部から直線的に体部へとのびる形態である。内外面には、ナナメハケが見られる。22は、脚付甕の接合部である。接合部外面にはユビオサエが見られ、脚部はナナメハケが施されている。

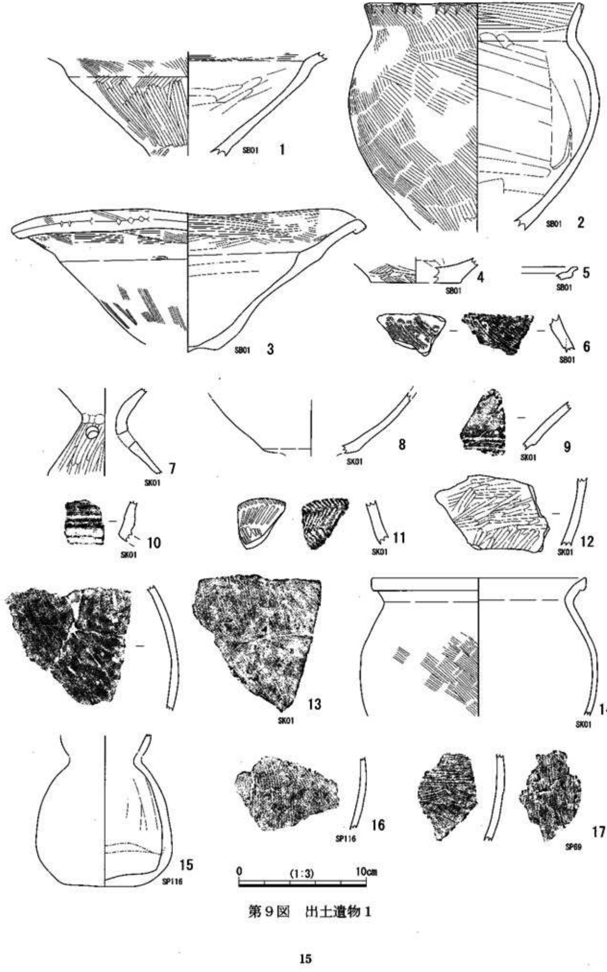
これらの出土遺物は、小破片であるため時期比定には困難を伴うが、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の幅の中で捉えられるものと思われる。

包含層出土遺物（第10図24～30） 遺物包含層とした２層から出土した遺物である。グリッドごとに取上げを行っているが、ここでは一括して報告したい。24は、部位不明である。粗い木目状の痕跡が認められる。25は、壷と思われる。外面に羽状縄文が見られる。26は、小型の甕である。口縁端部は平坦におさめ、キザミを施す。口縁部内外面にはナナメハケが見られる。27は、小型壷の底部と思われる。底部は厚手で、外面にはユビナデが見られる。28は、高坏の口縁部である。端部を折り返し、上端と下端両方にキザミを施している。29は、脚付甕の脚部と思われる。外面にナナメハケを行っている。30は、甕の口縁部である。体部からくの字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。端部にはキザミを施し、外面は口縁部をヨコナデ、体部をナナメハケ、内面は口縁部をヨコナデ及びヨコハケ、体部はユビナデをそれぞれ行っている。

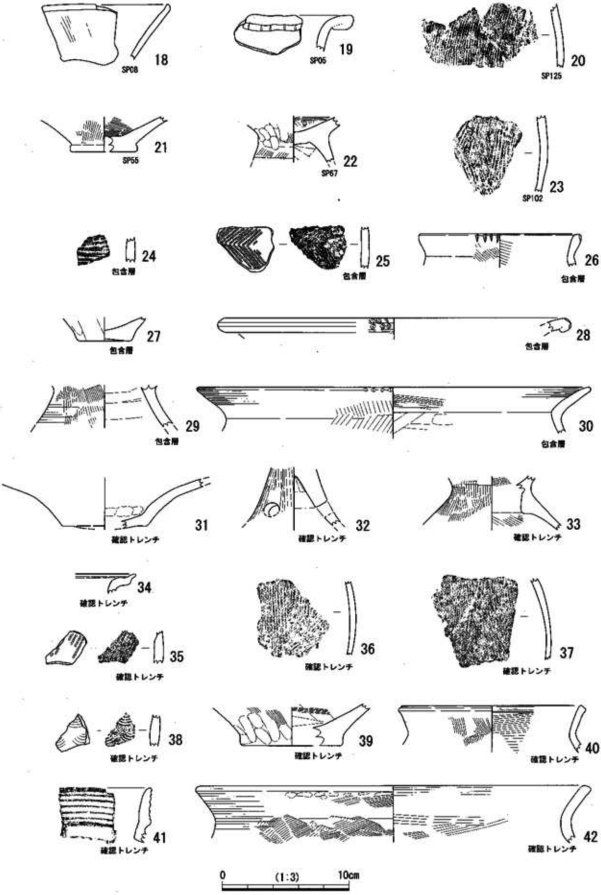
これら包含層出土遺物は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の幅の中で捉えられるものと思われる。

確認調査出土遺物（第10図31～42） 確認調査時に出土した遺物を一括して報告する。31は、高坏の坏部である。外面底部との境に稜をもつ。32は、高坏の脚部である。ハの字状に開き、円形の透かし穴が三方に施されている。調整は外面を縦位のミガキで、内面をユビナデで行っている。33は、脚付甕の脚部と思われる。外面はハの字状に開き、内面はくの字状に屈曲する。内外面にナナメハケを行っている。34は、Ｓ字甕の口縁部である。小破片であるため、調整等は不明である。35は、壷と思われる。外面に縄文が微かに認められる。36・37は、甕の体部である。いずれも外面にタテハケ・ナナメハケが見られる。38は、壷の一部と思われる。外面に扇形文が認められる。39は、壷の底部である。外面は底部付近をユビオサエ、体部をナナメハケ、内面は底部をユビナデ、体部をヨコハケがそれぞれ施されている。40・42は、甕の口縁部である。40は復元口径約14cmで小型、42は復元口径約30cmで大型のものである。いずれも体部外面をナナメハケ、内面をヨコハケとする。41は、壷の口縁部である。端部をやや尖り気味におさめる。口縁部には擬凹線が施されている。

これらの出土遺物は、31・32・34・40・41・42が古墳時代前期に、その他も弥生時代後期から古墳時代前期の幅の中で捉えられるものと思われる。


SB01 1
SB01 2
SB01 3
SB01 4
SB01 5
SB01 6
SK01 7
SK01 8
SK01 9
SK01 10
SK01 11
SK01 12
SK01 13
SK01 14
SP116 15
SP116 16
SP69 17
0 (1:3) 10cm

第９図　出土遺物１


18
SP08
19
SP05
20
SP125
21
SP55
22
SP67
23
SP102
24
包含層
25
包含層
26
包含層
27
包含層
28
包含層
29
包含層
30
包含層
31
確認トレンチ
32
確認トレンチ
33
確認トレンチ
34
確認トレンチ
35
確認トレンチ
36
確認トレンチ
37
確認トレンチ
38
確認トレンチ
39
確認トレンチ
40
確認トレンチ
41
確認トレンチ
42
確認トレンチ
0
(1:3)
10cm

第10図　出土遺物２

図版番号	取上番号	グリッド	遺構	層位	器種	計測値		調整・文様		色調	備考
						口径	器高	外面	内面		
図9-1	K226-99	C3	SB01	覆土	高坏		(8.3)	口縁部：ナナメハケ 体部：ナナメハケ後、縦方向のミガキ 坏部～体部：櫛刺突羽状文か	口縁部：ヨコハケ 体部：縦・横方向のユビナデ	にぶい黄橙色	SB01 P-8
図9-2	K226-92・97・98・104・114・134	C3	SB01	覆土	脚付甕	[16.6]	(19.1)	口縁部：ナナメハケ後、端部にキザミ 体部：ナナメハケ	口縁部：ヨコハケ 体部：縦・横方向のユビナデ	黒色	SB01 P-1・6
図9-3	K226-94・96・104	C3	SB01	覆土	高坏	27.1	(1.2)	口縁部：ナナメハケ後、端部にキザミ 体部：タテハケ	口縁部：横方向のミガキ 体部：ヨコナデ	浅黄橙色	SB01 P-3・5
図9-4	K226-114	C3	SB01	覆土	壺		(2.0)	底部：ナナメハケ後、横方向のミガキ	ユビナデ	にぶい黄橙色	
図9-5	K226-114	C3	SB01	覆土	S字甕		(1.0)			明黄褐色	
図9-6	K226-104	C3	SB01	覆土	壺		(3.0)	結節縄文	ユビナデ	褐灰色～にぶい黄橙色	
図9-7	K226-86	A2	SK01	2層	器台		(7.0)	坏部～脚部：ユビオサエ 脚部：縦方向のミガキ	ユビナデ	明褐色	SK01 P-15
図9-8	K226-42	A2	SK01	2層	高坏		(4.2)			橙色	SK01 P-12
図9-9	K226-43	A2	SK01	2層	高坏		(3.8)			にぶい赤橙色	SK01 P-13 内面に朱の痕跡
図9-10	K226-91	A2	SK01	2層	壺		(2.5)	口縁部：擬凹線	口縁部：ヨコナデ	淡橙色	
図9-11	K226-44	A2	SK01	2層	壺		(3.6)	櫛刺突羽状文		橙色	SK01 P-14
図9-12	K226-40	A2	SK01	2層	壺		(5.5)	縦・横方向のミガキ		黒色～橙色	
図9-13	K226-36	A2	SK01	2層	甕		(10.0)	体部：ナナメハケ	体部：ナナメハケ	赤褐色	SK01 P-6
図9-14	K226-39	A2	SK01	2層	甕	[16.8]	(11.0)	口縁部：ヨコナデ 体部：ナナメハケ	ユビナデ	橙色	SK01 P-9
図9-15	K226-101	C3	SP116	埋土	小型壺		(12.1)	摩滅のため不明瞭	縦方向のユビナデ	浅黄橙色	外面に朱の痕跡
図9-16	K226-102	C3	SP116	埋土	甕		(5.7)	タテハケ・ナナメハケ	ユビナデ	暗褐色	
図9-17	K226-113	C2	SP69	埋土	甕		(6.9)	タテハケ	ヨコハケ・ユビナデ	褐灰色～にぶい褐色	
図10-18	K226-51	A2	SP08	埋土	坩？ 高坏？		(4.4)	タテハケ		橙色	
図10-19	K226-48	A2	SP05	埋土	高坏		(3.0)	口縁部：キザミ		褐灰色～橙色	
図10-20	K226-145	C3	SP125	埋土	甕		(5.0)	タテハケ	ユビナデ	にぶい褐色	
図10-21	K226-79	B2	SP55	埋土	壺		(2.8)	底部：タテハケ	体部：ナナメハケ 底部：ヨコハケ	にぶい赤褐色	
図10-22	K226-111	C2	SP67	埋土	脚付甕		(3.6)	接合部：ユビオサエ 脚部：ナナメハケ	体部：ヨコハケ 底部：タテハケ 脚部：ユビナデ	にぶい橙色	
図10-23	K226-132	C3	SP102	埋土	甕		(6.1)	タテハケ・ナナメハケ	ユビナデ	にぶい橙色	

第3表　出土土器観察表

図版番号	取上番号	グリッド	遺構	層位	器種	計測値		調整・文様		色調	備考
						口径	器高	外面	内面		
図10-24	K226-15	C3・C4		包含層	不明		(2.0)			暗褐色	
図10-25	K226-22	北側壁面		包含層	壷		(3.2)	櫛刺突羽状文		浅黄橙色	
図10-26	K226-22	北側壁面		包含層	甕	[12.5]	(2.5)	口縁端部：キザミ 口縁部～頸部：ナナメハケ	ナナメハケ	浅黄橙色	
図10-27	K226-26	C3		包含層	壷		(1.8)	ユビナデ		にぶい橙色	
図10-28	K226-134	C3		包含層	高坏			口縁端部：キザミ 口縁部：ヨコハケ		にぶい黄橙色	
図10-29	K226-29	C3		包含層	高坏		(3.0)	脚部：ヨコナデ後、タテハケ	脚部：ヨコナデ	橙色	
図10-30	K226-13	C1・C2		包含層	甕	[30.9]	(3.5)	口縁端部：キザミ 口縁部：ヨコナデ 頸部：ナナメハケ	口縁部：ヨコナデ後、ヨコハケ 頸部：ユビナデ	にぶい橙色	
図10-31	K226-2	確認トレンチ		包含層	高坏		(3.7)	摩滅のため不明瞭	体部：ユビオサエ	浅黄橙色	確認調査
図10-32	K226-18	確認トレンチ		包含層	高坏		(4.2)	脚部：ミガキ	脚部：ヨコナデ	にぶい橙色	確認調査
図10-33	K226-2	確認トレンチ		包含層	高坏		(4.3)	接合部：タテハケ 脚部：タテハケ	坏底部：ヨコハケ 脚部：ナナメハケ	浅黄橙色	確認調査
図10-34	K226-8	確認トレンチ		包含層	S字甕		(1.5)			にぶい黄橙色	確認調査
図10-35	K226-1	確認トレンチ		包含層	壷		(2.6)	LR縄文		浅黄橙色	確認調査
図10-36	K226-1	確認トレンチ		包含層	甕		(5.8)	タテハケ・ナナメハケ	ユビナデ	褐色	確認調査
図10-37	K226-1	確認トレンチ		包含層	甕		(6.5)	タテハケ	ユビナデ	明黄褐色	確認調査
図10-38	K226-2	確認トレンチ		包含層	壷		(2.5)	扇形文		にぶい黄橙色	確認調査
図10-39	K226-1	確認トレンチ		包含層	壷		(3.3)	体部：ナナメハケ 底部：ユビオサエ	体部：ヨコハケ 底部：ヨコナデ	浅黄橙色	確認調査
図10-40	K226-1	確認トレンチ		包含層	甕	[14.0]	(3.3)	口縁部：ヨコナデ 体部：タテハケ	口縁部：ヨコハケ 体部：ヨコハケ	にぶい褐色	確認調査
図10-41	K226-1	確認トレンチ		包含層	壷		(4.4)	口縁部：擬凹線	口縁部：ヨコナデ	にぶい橙色	確認調査
図10-42	K226-1	確認トレンチ		包含層	甕	[30.2]	(4.1)	口縁部：ヨコナデ 体部：ナナメハケ	口縁部：ヨコハケ 体部：ナナメハケ	にぶい橙色	確認調査

※単位はcm・［ ］の数値は復元値を、（ ）の数値は残存値を示す。

V　まとめ

東原遺跡は、今回の調査により、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれた集落であることが明確となった。検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居１軒と、古墳時代前期の土坑、弥生時代後期から古墳時代前期の小穴多数である。確認調査では、本調査区の北東側で竪穴住居がもう１軒検出されており、生活の場として利用されていたことが窺える。

検出された遺構としては、竪穴住居（SB01）に床面が上下で２面認められ、建て替えが行われていたことがわかった。明確なプランまでは検出できなかったが、ほぼ同じ位置で下方に地床炉が、上方に炉（火皿）が設けられていることから、その変遷を捉える上で重要である。また、同じ位置で、同一規模・プランで建て替えが行われたことは注目されるものである。

出土遺物では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が得られ、東原遺跡の存続時期が明らかとなった。この時期の和田岡丘陵における集落としては、女高遺跡や溝ノ口遺跡などと同様の動向を示す。しかし、一方で掛川市内の集落では認められない壷（41）や甕（14）が出土しており、東原遺跡の性格を考えるうえで貴重な資料になるものと思われる。擬凹線の口縁部をもつ壷（41）は、県内では富士市宇東川遺跡より類例が出土しており、北陸系の特徴を持つものとされている（註）（富士市教育委員会1991・松井1999）。今後、こうした類例との比較検討とともに慎重な位置付けを行っていくべきであろう。

今回の調査では、調査範囲が狭いため、部分的なデータしか得られなかった。しかし、東原遺跡における集落の性格を考えるうえで、多くの視点を提供するものであったといえよう。

（註）袋井市教育委員会　松井一明氏には当該出土遺物を実見した後、御教示いただいた。

《参考文献》

【報告書】

松本一男　1983　『行人塚遺跡発掘調査概報』　掛川市教育委員会

松本一男　1986　『高田上ノ段遺跡発掘調査報告書』　掛川市教育委員会

松本一男　1988　『高田遺跡発掘調査概報』　掛川市教育委員会

前田庄一　1989　『女高遺跡発掘調査報告書』　掛川市教育委員会

松本一男　1990　『藤六３号墳・高田遺跡発掘調査報告書』　掛川市教育委員会

松本一男　1990　『女高遺跡・行人塚古墳発掘調査報告書』　掛川市教育委員会

松本一男　1991　『吉岡原遺跡発掘調査報告書』　掛川市教育委員会

富士市教育委員会　1991　『宇東川遺跡A・B・C地区発掘調査概報』

井村広巳　1994　『高田遺跡発掘調査概報』　掛川市教育委員会

村松弘規　1996　『女高Ｉ遺跡発掘調査概報』　掛川市教育委員会

井村広巳　2000　『溝ノ口遺跡』　掛川市教育委員会

【書籍・論文】

岩本　貴　1995　「菊川式土器における編年上の問題」『10周年記念論文集』財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

中嶋郁夫　1997　「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』第13

松井一明　1999　「静岡県における北陸系土器の伝播」『静岡県考古学研究』31

写 真 図 版

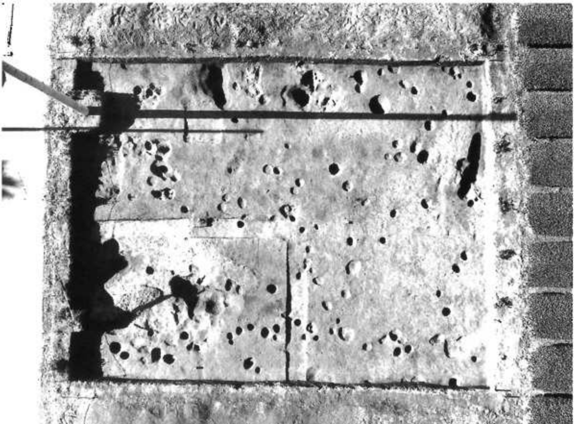
1．東原遺跡遠景（東から）

2．東原遺跡遠景（南西から）

1. 調査前状況（北東から）

2. 完掘状況（北東から）

1．完掘状況（南西から）



2．完掘状況（真上から）

1．SB01上面床検出状況（北西から）

2．SB01完掘状況（北西から）

1．SB01炉（火皿）（南西から）

2．SB01炉（火皿）・地床炉
（東から）

3．SB01地床炉（西から）

1．SB01土器出土状況（東から）

2．SP116土器出土状況（北から）

1．SK01土器出土状況（東から）

2．SK01完掘状況（東から）

1

7

3

14

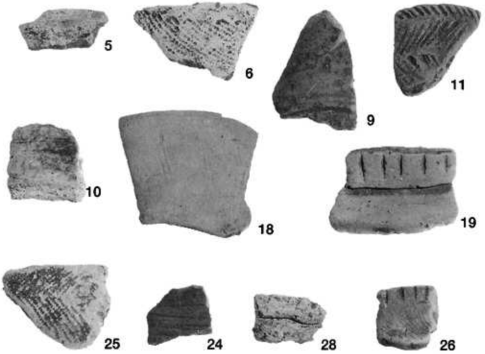
2

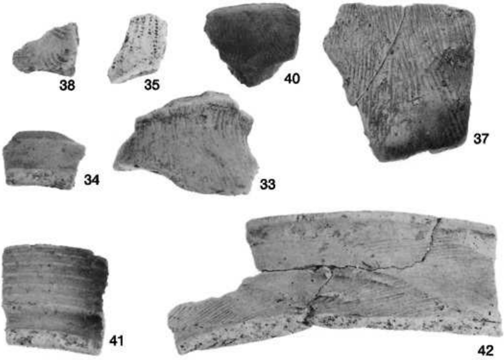
15

32

22

出土遺物①





出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	ひがしばらいせき
書名	東 原 遺 跡
副書名	自動車電話・携帯電話無線局鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	木村　弘之・吉田　始・菅原　雄一
編集機関	掛川市教育委員会・株式会社　フジヤマ
所在地	〒436-8650　静岡県掛川市長谷701-1　TEL（0537）21-1158 〒435-0013　静岡県浜松市天竜川町303-6　TEL（053）462-8800
発行年月日	西暦2005年３月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東原遺跡	静岡県掛川市 高田字東原 1146-2	22213	K－226	34度 48分 06秒	137度 56分 49秒	20041119 ～ 20050325	150㎡	自動車電話 ・携帯電話 無線局鉄塔 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東原遺跡	集落	弥生時代後期 ～ 古墳時代前期	竪穴住居　１軒 土坑　１基	弥生土器 土師器	

要　約	弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡である。弥生時代後期の竪穴住居１軒と古墳時代前期の土坑１基が検出された。和田岡丘陵における同時期の集落の広がりを知る上で、貴重な発見となった。

※緯度・経度は世界測地系を使用

東 原 遺 跡

平成17年 3 月25日

編集発行　掛川市教育委員会
〒436-8650　静岡県掛川市長谷701-1
TEL　(0537) 21-1158
株式会社　フジヤマ
〒435-0013　静岡県浜松市天竜川町303-6
TEL　(053) 462-8800
印　　刷　中部印刷株式会社
〒432-8052　静岡県浜松市東若林町1516-2